

38-7

明治三十八年六月二十八日第三種郵便認可
明治三十八年七月一日發行 みるる 第7



みるる

第一

新 〇本多鶴堂筆花と花 定價三十錢

刊 〇大下藤次郎選春鳥會繪葉書 第一輯 全 三十錢

松 繪 〇和田三造筆東京名所 全 二十五錢

聲 葉 〇太田三郎筆紅百合 全 三十錢

書 〇内藤三郎筆水彩藥物 全 三十錢

目 以上各六板唐組郵花三組連式式涉重紙數十種
録 の繪葉書目錄ハ郵券二涉送付次才呈す

注文規定

左の繪葉書に代金を添へて注文
ある方より從て賣價の二割引きて
差上て申附以繪葉書にて注文
品發送の寸通をアア上外又別に
此廣告の覽の旨にて直攝此注文
とホハ凡て一割引き差上アハ候



各種美術繪葉書發賣

東京日本橋區通二丁目

松聲堂



きかは便郵

内地は壹錢五厘
外國は四錢貼用

Union Postale Universelle.
CARTE POSTALE



金色夜叉繪葉書は、それを入れる袋の印刷でさえ、此位ひに凝つたものです。内容の如何に高尚で美しいかは、巻尾の廣告により、御求めの上御覽を願ひます。

盛文堂主人

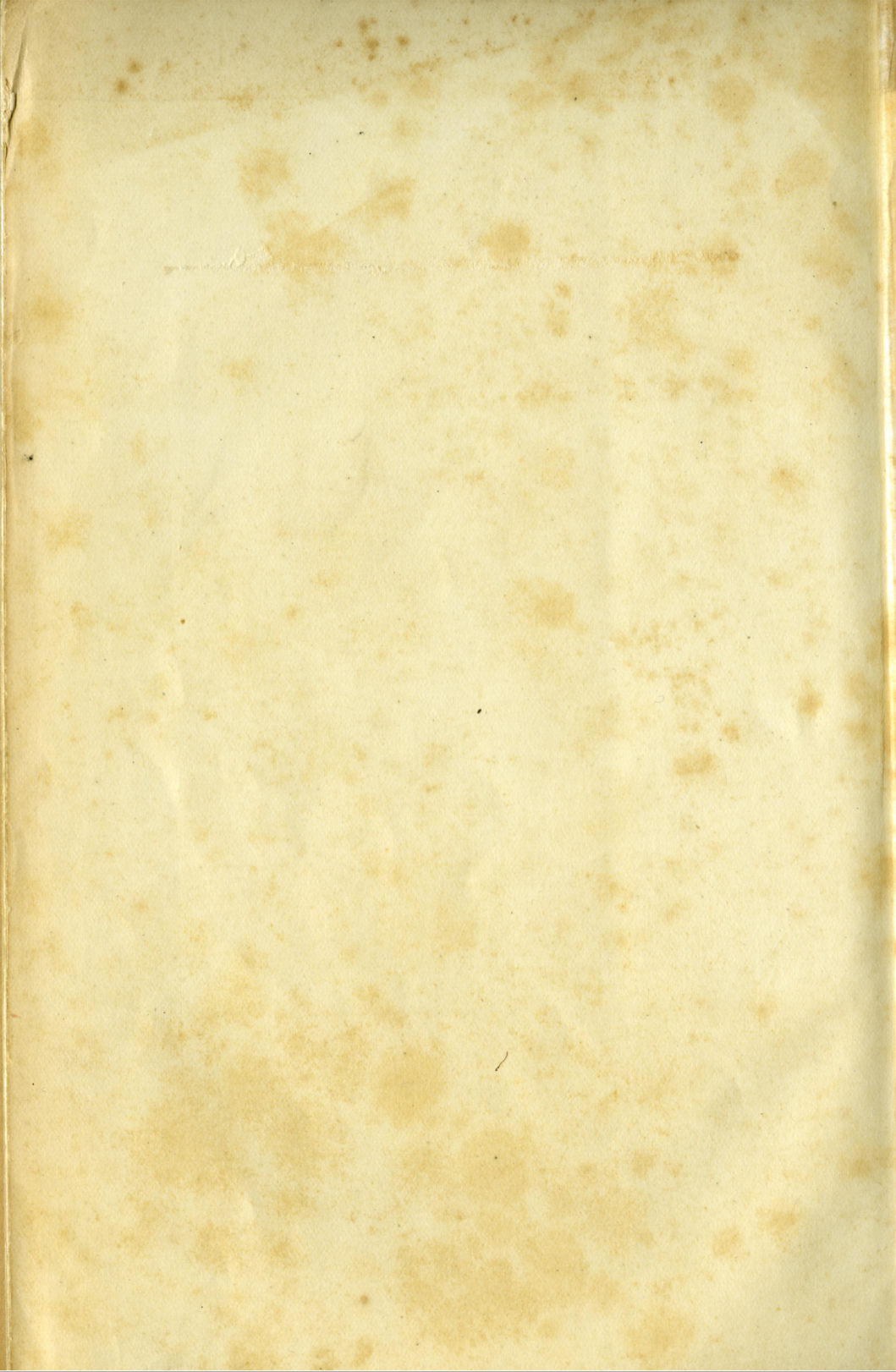
きかけ繪
金色夜叉
 大蔵次郎画



きかけ便郵

内地（郵便五里）
外島（郵便五里）







みづゑ第一要目

風景(水彩畫寫真版)

ROBERT LITTLE

發行ノ辭

鯨 船(水彩畫寫真版)

GEORGE GIBBS

近世英國水彩畫一班

寫生用遠近法(挿圖入)

寫生について

富士の裾野(水彩畫寫真版)

ALFRED PARZONS

富士山(紀行挿繪入)

アルフレッド・パーソンズ 著
嶋 澤 四 丁 譯

山上の朝(水彩畫寫真版)

うひまなびの方(消息文)

アルフツレド、パーソンズ氏を訪ふ

スケッチブック

繪葉書競技會記事(挿圖入)

讀で下さい

會 告

次號以下には、本號の續稿の外、色彩論一斑、鉛筆畫の初歩、英國水彩畫大家の傳記、寫生及び着色の注意、畫論是非、吾國十年前の水彩畫界、日本内地の寫生紀行、寫生珍話、東京附近寫生地案内、海外美術館の景況、寫生器具の作り方其他水彩畫に關する内外専門大家の意見を紹介すべく挿繪には、歐米諸大家の作品及吾國諸名家の傑作を續々登載すべし。

發行の辭

世に美術といへる高き趣味ある娛樂を知らずして、一般人士の嗜好漸く卑俗に傾かんとするを嘆じ『水彩畫の槩』一篇を舁して、青年士女の注意を求めましたのは、今より四年前のこの頃でありました。然るに、幸ひ機運の熟せる折柄とて、其書の杜撰なるに拘はらず、多少刺戟の功を奏せしと覺しく、近來水彩畫の普及は、全國到處小アーチストを見ざるなきの盛況を呈し、且美術に對する世人の嗜好も、數年前に比して實に隔世の感ある程進歩して參りました。洵に喜ばしい現象ではありませんか。想ふに水彩畫の今日の勢を成せしは、かの隆替常なき、一の流行といふやうな淺薄なるものではなくて、確に社會の進歩に伴へる、即ち時代の要求であると思ひます。何故なれば、水彩畫は今や、單に娛樂としてのみでなく、實用上習得せねばならぬといふ要素を供へて居るからであります。せう。されば私は今後の發達に向ふても、出來得る丈け力を盡して見たいと思ひます。私がこのやうな雜誌の發行を思ひ立ましたのは、一昨年の秋でありました。歸朝後、さる地方へ旅行致しました時、その地に水繪具で寫生をしてゐる少年を見ました。私はかゝる僻邑に同好者の一人を得て、少なからぬ興味を覺え、其人と語り、其人の繪も見ました。然るに、此少年は畫才の見るべきものあるに拘はらず、都門に遠きため、未だ眞の水彩畫なるものを知らず、勿論技術上の新説を聞くの機會もなく、自分の執りつゝある作畫の

方法が正當なりや否、進歩しゆくべき道を知られば常に不安を感じて、繪を描き乍らも充分の慰みを得られぬといふを見出しました。想ふにかゝる迷路に立つの人は猶他に多かるべく、此際専門畫家の技術上の講話、意見、さては泰西水彩畫の名作を、不充分ながらも同好者に知らせる機關があつたなら、斯道の進歩發展の上に、幾分の益あらんと其時深く感じました。

爾來、雜誌發刊のを、二三の人々に圖つて見ましたが、恰も水彩畫の乗發行當時と同じく、誰も率先して此事業を起すものなく、不得已私自ら修業の餘暇を割て、其任に當るようになりました。若し此企が、私最切の希望通り、水彩畫に遊ぶ士女の伴侶となり、俱に娛しみ、共に進みゆく媒となるとが出来ますれば、洵に幸であります。

明治三十八年六月

大下 藤次郎 識

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*



みづゑ 第 壹

明治三十八年七月一日發兌

近世英國水彩畫一斑 (上)

水彩畫の大派が英國美術史中に主要なる部分を占め、その基礎を強固にしけるは、今より百五十年餘の昔なりき。實に紀元千七百五十年以前にあつては、英國丹青家の間に於ける水彩畫の位置は極めて低く、將來流行の兆は更に見えざりしも、其間種々に工風を凝し、水繪具によりて最有望なる描法を案出したる諸名家も少なからざりき。爾來出來得る限りこれが發達に力を盡し、初めて水彩畫なるものゝ存在の基を成立せしむる事とはなりぬ。

水彩畫派の劈頭第一の畫家をポール・サンビー (POUL SANDBY) とし、世呼んで英國水彩畫派の父と稱せり。氏と其弟トーマス (THOMAS) とは令聞殊に高く、十八世紀の美術教育に關しては著しき勢力を有せる人々にして、また今日に到る迄美術に關する智識趣味等を一般に普及せしめたるは、此二氏の力に待つ處多かり。

トーマスは建築を主とし、ロイヤル・アカデミーの建築學の最初の教授なりき。ポールは風景、人物、肖像の畫家として當時斯界に異彩を放てり。千七百二十五年より千八百九年に至るまで八十四年の生涯中、水彩畫の進歩發達に連れて、諸名家の續々輩出しけるも、其多くは皆氏が門業にて、然らざるも氏が技巧の庇蔭を蒙らざりしものなし。今茲に同時代の畫家の名を舉げんに、
ジェー・アール・コーゼンス (J.R. COZENS) シェル・バレット (GEORGE BARRETT) トーマス・ギルチン

(THOMAS GIRTIN) ジョーン・ヴァーレー (JOHN VARLEY) ゲーレンス・ボロー (GAINS BOROUGH) 等重なるものにして、恰も有名なる水彩畫家ターナー (TURNER) デ・ウィント (DE WINT) チビット・ロックス (DAVID COX) ウィリアム・ハント (WILLIAM HUNT) サミエル・プロート (SAMUEL PROUT) カブレール・フェールディング (COPLY FIELDINGS) のその如く、水彩畫をして高尚なる地位に進むるの好果を得せしめけるなり。實に當時に在ては、水彩畫に熱心に種々の畫風を創成したるものは洵に稀なりしと雖も、それ等少數の人々によりて、良好の識見も發表せられ、流行派或は不易派の進化をも助長せしめ、水彩畫の目的をも充分に世に知らしめ、且その方式をも完成するに到れるなりき。ポール・サンビーの滔々たる諸名家中、嶄然一頭地を抜く所以は、水彩畫の技巧に關する新見識を發表したる精神に存するなり。實に氏は從來美術の上に永く享け來れる制肘惡慣例打破の先鞭者にして、かゝる惡慣例より超然獨立し、究竟美術の健全なる發達を遂ぐるに到れるなり。氏は美術の約束に就て、甚だ自由なる思想を持したる熱心なる自然の研究者にして、實に自然をして吾が藥籠中のものたらしめしなり。氏の作品中には確に二つの方面あるを見る。一はかのグランドスタイルの迷信者に蹂躪せられたる時代に流行を極めし古典派(クラシズム)の、面影の存するものにて、他は格式等を一掃して郊外の風物より得來りたるもの、これやがて自ら活氣の存するものある所以なり。

サンビー氏が、美術界改革に就て、自然寫實の動機を興へたるその主張は、公明正大なる確信より進出したるものなれば、時の美術家中いかでこれを歡迎せざるものあらん。當時氏の新論の、多數美術家の賛同を得たる所以は、他なしその確信を世に發表する手段の、頗る溫和的に、誇張を避けて、從來世の人の耐へ能はざる難事となしたるものを、氏は比較的に容易なる方法を示し、水彩畫を以て如何なるものをも書き得べしとの動機を興へたればなり。

此時代には、水繪具を以て單に黑白畫を作る爲めに用ゐ來りしものにして、自然界の描寫など夢想だもせず、たゞ一の圖案を作るや、その鉛筆又はチヨークにて組成し、慣習によつて定まりたる施色法にて淡く彩色するに過ぎず。この方法は現今建築製圖者の間に行はるゝものと同一なり。かゝる不自由なる手段によつて、水繪具を用ゐ來りしを以て、其結果は、水繪具を以て各自の深遠なる思想を表はす能はざるものと斷定せられつゝありしなり。その頃時好に適せる佳絶なる風景畫を印刷すること流行せしため、その下畫として、線と色彩を組合せたる極めて下劣なる、且無價値なるもの續々作り出されしを以て、もし美術家にして、その品位を保たんとするには、必ず油繪を製作せざるべからず。世人もまた水彩畫なるものは、其實古風の畫法にして、他の作品の附屬物の如き感を以て、殆ど度外視しつゝありしなり。乍併十八世紀の末に到つて、かゝる謬見は忽ちに消失し了れり。前記ポール、サンビー及び、同時代の畫家の精苦によつて、不完全なりし水彩畫に新生命を生じ、それに連れて良好なる鑑賞の風も起り、世間も美術界も以前の陋見を捨て、水彩畫に對して大に尊敬を拂ふに到りぬ。爾來水彩畫の進歩發展に瓊の頓挫なく、畫法の束縛も漸々消滅し來り、題畫選擇の狹隘なる制限も廢りて、廣く且自由になりぬ。隨て色彩使用の慣例も破れて豊富となり、配色の上にも大變化を生じたりき。

ターナー、デウイント、コックス其他の諸名家は、水繪具の使用に關して明確なる價值ある、表情的配色の好例を残せしため、後繼者は喜んで其衣鉢を傳へ、以て現代に到る迄、熱心の度を加えつゝ持續しつゝあるなり。溯つて考ふれば、かくも今日世間に重んぜらるゝ水彩畫の發達は、百五十年前新説を稱へ、自然の描寫に於て、舊派の畫家の觀察力にては、得て望むべからざる底の大進歩を促したる、ポール、サンビー氏の功勞に歸するゝ勿論にて、吾人は此光榮ある好果に對して、深く氏に感謝せざるべからず。

寫生用遠近法

眞野 紀 太郎

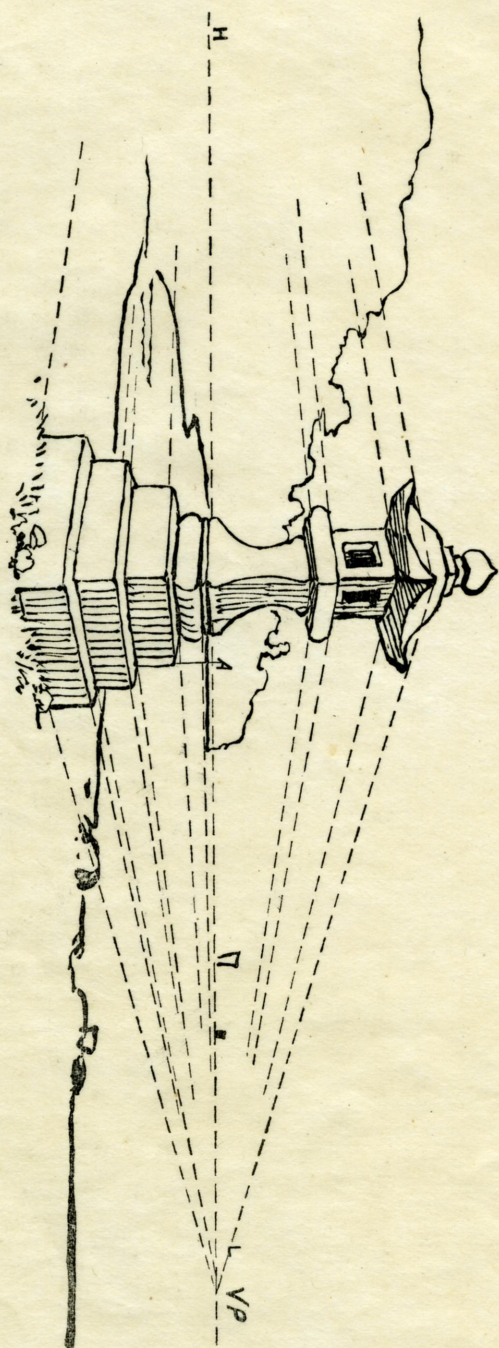
大にして高き富士山も、遠ければ小にして低き鳥居の間から見るとが出來、眼前一枚のはがきは、よく武蔵野の全景をも掩ふとが出來る。これは物に遠近の差があつて生ずる現象であるが。試みに諸君が鐵道線路の上に立てば、其二條のレールは終には一點になつて仕舞ひ、又沿道の電柱は、遠ざかるに従ひ低く、小さく、終にはレールと同じく一點に消滅して仕舞ふのを見るであらう。このやうに物體が遠近の工合によつて縮少してゆく割合を正確に描き出す術を遠近法をいふのである。

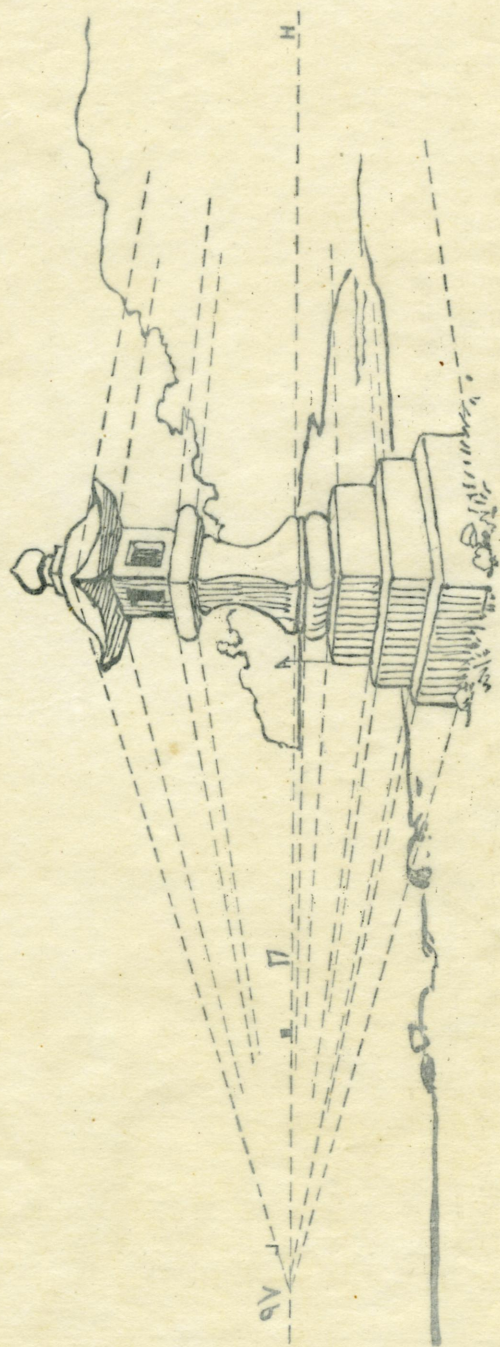
繪をかくに遠近法の心得の必要なるは言ふ迄もない事で、此理を無視しては、極めて簡單なる小箱一つさえ寫し出す事は出來ぬ。況んや戶外寫生に出て、家屋や道路や、一步進んで殿堂などの複雑したものに到ては、到幾輪廓さへも取ることは出來ぬ。それゆへ苟くも繪を描うと思ふ人は、遠近法一般の知識は、是非心得て居らねばならぬ。

遠近法も一科の學問で、此理法を悉皆知悉するといふのは容易な事ではない。又繪を慰みにやる人々には、それ程深く究める必要もない。よつて爰には、極めて小むづかしき術語を避け、初學の人々に、極々必要に、且應用の出來易い卑近な物體を捕えて、尤も解し易き方法によつて號を逐ひて説明して見やうと思ふ。

〔一〕石燈籠(挿圖參照)

この圖はある湖畔にある石燈籠で、畫者はA印を眼點として(正しくA印に向つて)、燈籠より一丈六尺離れて見たるときの遠近圖である。燈籠の高さは八尺、畫者の眼の高さ、即ち水平線は三尺五寸(三脚床几に座せるものとして)と假定されてある。さてこのやうな位置で遠近圖を作ら





うといふには、先第一に水平線 HL が、燈籠のどの位の高さにあたるかを見定める（此圖でば下から四段目の上邊にあたる）、そして見取定木をとつて、上部は燈籠の廂の傾斜、下部は臺石の傾斜とを量り、その線を假定された水平線の上に迄延長して、その一致した點が即ち消點である。そして燈籠の同じ方向の線は皆此消點に集むれば、各部の割合が出て来る。そのやり方は右も左も同様であるが、畫者の居る處によつては一方の角度が鋭くなると同様に、反對の側の角度は鈍くなるものである。

以上は單に割合を示したに過ぬ。見取定木を注意して使用すれば、殆ど間違なく遠近圖が得られる。寫生にあつて一分一厘間違つてはならぬといふむづかしいとを求むるのではない。只畫をかく人が、遠近法といふのはこのやうなものであるといふ道理を知つてゐて、甚しき誤りを、繪の上に現はされればよいのである。（水彩畫階梯二十四頁參照）

寫生について

大下 藤次郎

單に寫生といふてもいろ／＼ある、物質の研究のため〔一〕、直ちに繪にするため〔二〕、濃淡の調子を研究するため〔三〕、瞬間の現象を寫すため〔四〕、繪の組成に要する材料を得るため〔五〕、その他種々なる目的に分れてゐる故、その描寫の方法も素より一様ではない。先づ第一の場合には、其寫生畫をその儘美術的の繪にするといふやうな考を去つて、觀察しただけ正直に、其物の本質を誰にも解るやうに寫さねばならぬ。例へば樹木を描くとすれば、全體の形狀色彩などの正確であるべきは勿論、幹や枝の硬柔、葉の厚薄、その濕ひの度迄も現はされねばならぬ。乍併博物の標本とは異ふから、同じ寫實にしても、唯外面のみでは充分でない。徒らに精緻の筆を弄したとて、觀察が粗であつたら、單に機械的になるばかりで、眞の寫實とは言へない、否却て大體の趣を失ふ恐れ

がある。夫故まづ其物の特質を見取つて、それに力を入れなければ、決して内部に含まれたる精神を描き現はすとは出来ぬ。竹を寫すに杉と同一描法にては、決して其竹の勢を示し難いであらう。要するに物質寫生といふのは、織物を寫せば絹か木綿か毛織であるか、その光澤や粗密の相違、即ち特質を見極め、それを現はすべき適當な描法に従ひ寫生するといふまで、従つて對象によつては少なからぬ時間にもかゝれど、がゝる研究的寫生は尤も必要であるから、初學の人は多く此方面に従事せられたい。

第二の繪にするための寫生は、第一に比して、頭の働きが餘計に入用である。まづ位置の選擇が容易でない(平凡な揚處を立派な繪に仕上るのは専門家すら難しとする處である)、その場處は形も整ひ、色も豊富で、明暗の調子もよく、その上自分の伎倆で出来る範圍内のものでなくてはならぬ。物質寫生の素養を持たぬものは、爰に到て種々なる困難を感じるのが常で、木一つ石一つよく描けぬものに、多くの木や石や其他の複雑なものゝ集まつてゐる、大なる景色が寫し得らるべきものではない。岩が綿のやうであるとか、手拭がブリキ板に見えるなどの批難を受けるは當然である。猶此種の寫生には、物の位置を變へたり、有るものを剷り、無いものを添え、又は赤に見えるものを黄に、明るきを却て暗くするなど、繪にする上に其必要があれば、必ずしも目に映じたる對象に拘泥するに及ばぬが、自由のあるだけそれだけ責任もあつて、取捨に幾多の苦心を要するのである。又單に自己の研究としての寫生なれば、よし出来榮は面白からざるも、一部に満足すべき經驗と効果を得れば、目的は粗ぼ達せられてあるが、繪とする爲めの寫生は、一部よりも全體の調和が肝心であるから、畫面が散漫に流れぬやう、全體としての調和を失はぬやう充分注意せねばならぬ。(つゞく)

注、イは組たて。ロは寫すべき對手、物體。

富士山

アルフレッド・バウソンス著
菊澤 四丁 譯



日本の名山は其名歐米人の間にも知れ渡つて居て、其形は屏風や扇子に數限りなく描いてある。外國人の間にはフジヤマといふて、モンブランク、パイクスピークなどのやうに有名なものである。日本人はフジ、またはフジサンといふて、詩的にいふときはフジノヤマである。その名は何と呼ばれやうとも、此山には不思議な魔力を持てゐる。東京や横濱から電話線の霞に透けて見えたり、または駿河灣上の波越しに此山を見ると、必ず旅行者の記憶に留まるのである。富士山は海拔一万二千尺、わたりには肩を比ぶべき山がなく、麓が廣く山頂が狭く千秋に聳ゆる様は、大志を抱くものをして欽仰措く能はざらしむるのである。

休日目的を完全に行ふには登山に限ると自分は思ふ。若し休日に河へ往くと、見るもの毎に寫生の位置などを考出す、そのなると舟を止める、自然遊びといふ目的に背く。それで物を見る嬉しさと、働かればならぬといふ嫌惡な感じと、交々到つて心を迷はす。一體考へるといふとは休日には禁物であるが、通例河では考へる時が多い。平坦な道路を歩行するのもこれと同じで、實際に歩行すればする程考へるものであるが、高山へ登る時は、惣ての思考をする時がなくなつて、單に肉體的の勞力ばかりになる。此境に到ると唯機械的に、忙がしい心臓の鼓

動と、酷く重い脚を曳擦つて行くのみになる、それで山嶺に達すると、言ひ知れぬ崇高の念が胸中に湧いて、足下に下界を見

渡すと、半ば

雲に隠れ、半

ば現はれたる

地上の、美は

しい神祕的

な、絶對的に

描き得べから

ざる景致を

見、同時に宇

宙の廣大無邊

にして、簡性

の極微である

といふ感に打

たれて、無我

の境に入るの

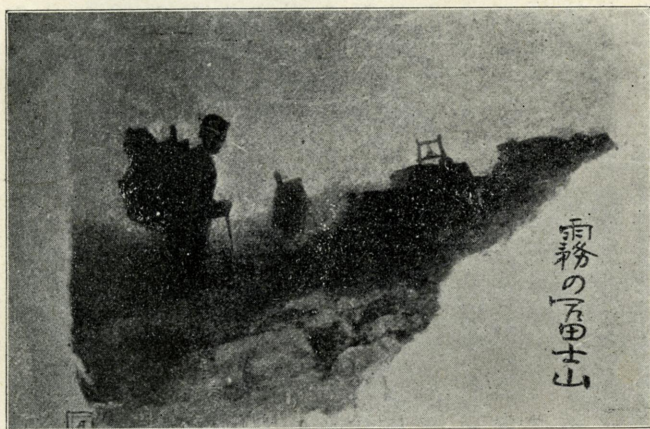
である。自分

が數年前初め

てミルトンの

失樂園《バラ

ダイスロースト》を讀んでから後にサンマアセツトシャイアの山頂に登つてグラストンバレーの平原を望んだ時に、アダム



の朝の歌を讀むの感が心に起つたことがあつた。

『あなたは繪を描いて非常に愉快でせう』といふやうな事を人々が畫家に向ふてよく言ふものであるが、これは繪事を打球や釣魚の娛樂と同一視してゐるのである。特に風景畫家の如きは、年中休日て遊んでゐるやうに見える。併しそれは見當違ひで、見てゐる間にすん／＼變化してゆく空や、散り易い花などに對する煩悶勞苦の程は容易なものではない。そしてまた是をどうあれを何う描かうかと絶間なく心を勞するを知る人はたんとない。

さて横濱にゐる友人から、富士登山の同行を促がされたので、喜んで早速御受をした。時は八月の初週、丁度天候もよし、富士參りの道者をも見られるといふ。全體新しい興味のある國を漫遊するのに、總て時間づくめて、時計と相談して、もう何分て何處迄行くなどいふ人と同行する位嫌惡なことはない。併し自分の友人はそんな人ではないから、吃度諸處を見歩行くに充分時間を與へて呉れるであらう。

出發の頃の天氣は何とも受合はれなかつた。日本には有強ちの蒸暑い日で、山の上には重い押付られるやうな濃い雲で、朝から晩迄覆はれて居つた、そして雲は谷合から徐々に立昇つてゐるやうに見えて、山巔に於ても快晴の見込はなさそうであつた。宮の下から蘆の湖までは、時々刻々にこんな雲に蔽はれて、霏々たる雨さへ加はつて來るので、快晴ならば心地よい歩行も、今日は洵に物憂かつた。湖畔の北方に仙石原といふ原があつて、

家畜の群が處々に見えた。かゝる處は日本には他にあるまい、轉た自分の故郷に在る感じのせられて、懐かしい極みてあつた。

初めは乙女峠に通じてゐる道に合して、富士山麓の一村御殿場へと出る筈であつたが、人夫が長尾峠を通るのが近道であるといふので、左側から登つて峠の頂きの標示のある處へゆくと、霧の爲めに方角が解らなくなつて仕舞ふた。折しも爰に溫顔有徳の一老翁が忽然として顯はれた。吾等には救ひの神と思ふて其老翁の案内で、これから同じやうな道をとつて、凡そ半時間を過たと思ふ頃、殆ど身を没する程の濡れた草道へ這入た。わたりは深い深い霧で、十ヤードも先は何物も見えない。こゝで老翁は道に迷ふたとを白狀した。この道は聞いてはゐるが、通るのは初めてであるといふとて、不得止また元來た道を歸つて、標示のある處へ再び出て、今度は廣い道をとつた。この老翁は年は七十四で、なか／＼面白い人だ。リュマチスで惱んでゐるので、二十哩を遠しとせずして、溫泉に來たのである。お易いところある爲めか、それとも溫泉の効能が知らぬが、自身の行くべき道からは五六哩も離れた處まで、迷ふた道を正して、御殿場への正道へ導いてくれた。

霧が山の下へ／＼と匍匐ふやうに下つて離れると、足下には海が見える。白砂の大曲浦、田子の浦といふて、駿河灣を抱いてゐる。これから緑の傾斜が上つてゆくのをみると、それが富士であらうと思つた。併し殆ど二千尺餘の白雲の長堤が、全景を掩ふてゐるので、富士の頂きが何れであるか見分がつかなくかつ



た。道は山側を通じてゆく、或は上り或は下りして、終に北方に下ると、耕作地があつて、纏て鐵道停車場の茶屋へと着いた。こゝには吾等の荷物と食料が待つてゐるのである。

山へは四時登るとは出来るが、七月末から九月初旬迄の間でないと、途中に休息所が開けてないので、食料等の準備もしてゆ

かねばならず、その上雪を踏んで登るのは甚だ困難であり、天候不穩の時などは尤も危険である。それ故東海道線の一驛たる御殿場田は、富士開山の七週間は人子々の頻繁に往來する處である。



浦宿屋は富士參詣者で充満してゐる、明日登山しやうとするもの、山から下つて來て疲れた足を洗ふてゐるもの、または大きな笠と金剛杖とを束にしてゐるものなど、

どが、喋々として何事か話してゐる。夕飯後旅行者の一團は、茶屋の前に集まつて、歌と踊りとして吾等を歓待してくれた。奏樂の一隊は二挺の三味線と、棒で叩く鐘と、竹の笛であつた。踊手は皆小さな娘で、年は十歳から十五歳位まで、着衣は普通

の袖の長いキモノで、その身體や、細い手や、足の動作が甚だ美しく、變化に富んで居つた。演奏は歌と對話と混同である。音楽は調子がなくて、外國人の耳には嫌惡な氣のする不思議なものであつた。併し日本の眞正の國民樂には、人をして魂飛び魄躍らしむるものがある。

翌朝未明には宿は沸くが如くであつた、參詣者の多くは早立をして日の暮迄に山嶺に登り、そこに一泊して下山するのであるが、我等は山上に二夜を明かさうといふので、別に急ぐ必要はない。我等の重い荷物は、馬の背で山の北口吉田迄運ばした。三人の人夫が案内者なり運搬者なりで、これに外國人の腹に必要な堅い食物や餘分の衣類を持たせて往つた。昨夜の踊子共は村の通りを流して歩行いて居たが、晝見ると皆穢くて、その動作も決して美しくはなく、人を惹ける力などは無論なかつた。

御殿場から頂上への道は古い火山灰の床上である。初めはだらだら登りて、小路が野中に曲つて、紅白の花の生籬のある小家が處々に點在してゐる。數哩ゆくと稍々急阪となつて、火山灰は粗く、稀に耕作地を見るやうになる。この邊は灰色の廣野で、たゞ蕨と野生の花とがあるばかり。霧は猶晴れない。何方を見ても風景は見えず、若しこの花がなかつたらこの旅行は實に物憂いものであつたらう。時には草刈が草の大束を背負ふて宛ら草の歩いてゐるやうに見えるのや、小馬に積んで歸るのもあつた。小馬は前の方に形の醜い首を突出して、下の方には細長い

脚が四本、股は猫のやうで、後脚の鬣は牛のやうに、重荷を背負ふて、のたり／＼と歩いてゐる。日本畫の馬は、このモデルを見て初めて解した。實に田舎馬のやうな無格恰なものに他にはあるまい。石地を多く歩くので、足には大きな藁の沓を履かして、蠅除けに木綿の紺の四角な布をかけて、また腹には紅い紐や房の附いた飾りをつけてゐる、そして參詣者を馬返しの茶屋迄乗せて来る。

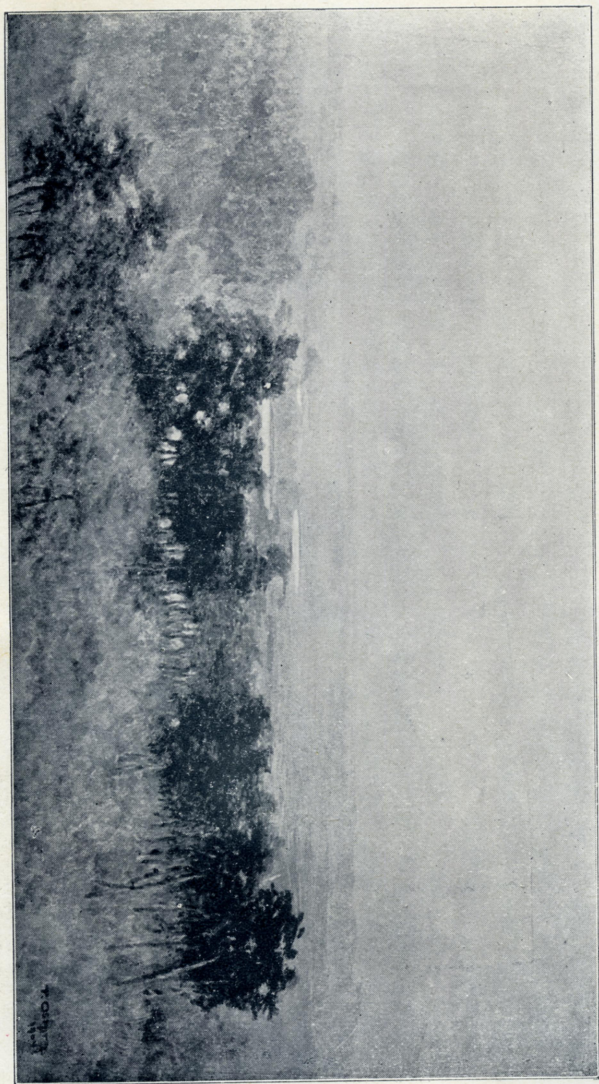
耕作物がなくなると全く焼石のころ／＼道になる。こゝに豊富な植物は、白いすい／＼とした花の咲く薄で、これは山の麓迄ある。また釣鐘草の種類があつて、紅い花で黒點が見える。此方面の植物は千七百六年の噴火のために枯死したので、山の北方よりは豊富でない。山へ登れば登る程險阻になつて矮い細い杉が一面で、太郎坊といふ小宮の傍の茶屋の處で止まつてゐる。こゝで參詣者は杖を買ふて上る。杖は樺製の八角に削つたもので長さ殆ど五尺許り、それに焼印が押してある。頂上へ往て數錢を投じると、神官が、頂上へ來た標に赤い印を捺してくれる。午後、可なり早く第二の避難所へと着いた。大きな濕つた霧の一團がたえず山側に逼つて来る。この先に暫時何もないといふので、こゝに一泊するとした。富士の道は順序よく十個に分けてあつて、休息の小屋がその境としてある。御殿場道から二合目の小屋は廣く出来てゐて、溶石の塊で築いてある、下から見ると穴のある壁のやうに見えるが、上からは何も見えぬ。煙筒なしに火を焚く上には雪が澤山積重れてある、そして家根へ



湖 口 川

管をかけて水を取る仕掛けになつてゐる。

此地の午後は甚だ荒涼たるもので、上を見ても下を見ても、紫がいつた風色の火山灰ばかりで、處々に薄や薔が青く見える。こんな景色が霧の中などこ迄も續いてゐて、この長い斜傾線の單調を破るものとしては、たゞ寶永山の小高い處が見えるばかりである。(つゞく)



うひまなびの方へ

いよく水彩畫御初め遊ばすに御決心なされ候由、何事にも御熱心なれば、他日の御進歩今より思ひやられ申候。學校にて學びしは日本畫にて、鉛筆畫の素養不充なればと御氣遣ひの御様子御尤もには候へ共、先日拜見致せし御手際にては、物の形を寫すに御不足あるべしとも覺えず候。色彩畫を學ぶに墨繪の講習は、元より必要缺くべからざるものに候へ共、將來専門にと申考てなく、只慰みに旅行先にて繪葉書位を描ければ満足との覺召なれば、今後御間合に鉛筆にて濃淡の調子など、御研究に相成候はゞ充分なるべく存候。私の知り合のうち、ある人は、最初輪廓さへも碌にとれぬに拘はらず、大膽にも水彩畫を始め、僅か一二年にして兎に角他人に見せてもさまで耻かしからぬものを、描き得るやうに相成申候。素より高き鑑賞に耐へ得べくは候はれど、自ら娛しむには餘りあるべく存候。これに反して他の一人は、手重く構へ、是非正則にと毎日鉛筆いぢりを致し居候ひしかど、素より色ある繪に比して興味薄きためか、中途より嫌氣生じて終には畫筆を棄つると相成申候。さて準備として新に御買求めの品々は、贅澤に限りなく候へ共最初のうちは不殘取揃へるには及ぶまじと存候。先第一は繪具箱にて、五圓六圓の贅澤な品は用なく候へど、二三錢の和製にては間に合申さず、十三四色入中蓋つきたるものに壹圓前後の品適當かと存候。十八色二十色入と申ものも必ずしも自分

の入用の繪具ばかりに無之、いづれ後に好める色を買足さればならぬと候。筆は八號一本三號一本あれば間に合可申、黒毛羽根軸の上等品なればかなり使用に耐へ可申候、是は和製にてよろしく候。輪廓をとるための鉛筆はHB位の硬さのものの使用に便利に候。消ゴムは後には殆ど入用なくなり候へ共、初めは軟かなるもの一つ御用意なさるべく候。紙は最初よりワットマンやO、W、に及ばず、上質の畫用紙にて充分に候。畫板の御持合せなくば、洋畫紙ハツ切大のスケッチンクブロッグ一つあれば暫時使用致され可申候。尤もそれより小なるスケッチブックにてもよろしく候。以上の品々の外、見取棒一つ、コッブナリ鉢なり筆洗となるべきもの一つ有之候はゞ、いつにても水彩畫を始められ可申候。戸外寫生には猶入用の品も御座候へ共、急いで御求めには及ばず、繪具箱や紙を風呂敷敷包みとせば畫臺は不用、筆洗はインキか香水の空壺にて澤山、膝の上で描けば畫架や寫生箱の用なく、到る處木の根、草原、捨石を見出すと雖かるまじく、古新聞一枚あれば、三脚も當分は無くとも濟み申べく候。何れ御仕度整ひ候上は御通知下されたく、その上にて又々心づきし事ども詳しく可申上候草々

* * * * *

甲「君は畫家でありながらスケッチブックを持てゐないれ？
乙「へん鉛筆で急がしく紙へ描いて置くのは。君達のやうな新米のことさ！ 僕はちやーんと頭へ寫して置くよ

アルフレッド・バルソンス氏を訪ふ

行 登



アルフレッド・バルソンス氏は、ロイヤルアカデミ

ーの會員にして、花を描く巧みに、夙に水彩畫に名あり。十數年前吾國に來遊せしとき、

百餘枚の水彩畫を作り、東京美術學校に陳列

して、有志の士に其技を示せしとありき。吾友三宅氏の、水彩畫専門に志を定めしも、此時よりなりしと聞く。畫伯が彥根に於ける寫生畫二面、現に横濱英人某氏の應接室にあり。余は屢々その繪に接して、自己の研究に少なからぬ資益を得たりき。余の會てロンドンに在りし時、一日、吾國水彩畫界に因縁淺からざる、この老畫伯の畫室を訪ひき。

さゝやかなる鐵門によりて、案内の絲を引けば、彼方にベルの音鳴り響き、やがて少女の出て來て余を導くなりき。長き廊下を傳ひゆけば、片側には水彩、鉛筆などの小書き繪あまたあり、他の側には、さまざまの美はしき花さける盆栽數多く并びたり。畫室は奥まりたる方にあり。折柄老畫伯は、この春のアカデミーに出品すべき、梨畑の油繪に筆を揮ひつゝありしが、笑かたまけて出迎へられ、恰も故舊の如く親しく語られ、また近什の數々を所挾き迄取出して示されぬ。畫伯の油繪には世人も多く賞讃せず、余も又敬服の念を生じ難かりしかど、その水繪具にて花を寫せしものには、驚くべき巧緻の作ありて、觀察の精透、技巧の熟達、他人の企て及び難き點少なからず。但し

色彩美麗に過ぎて、所謂俗受の傾あるは稍々惜むべし。畫伯が日本に於ける寫生は、猶こゝにも一枚あり。そは吉野山中子守神社の八重櫻を寫せしもの。今これを取て、近作薔薇園の圖に比するに、進歩の跡極めて著しきを見る。吾國の畫人、壯年の域を過ぐるや、元氣銷沈、進歩は愚か次第に後戻りをなすもの少なからぬに、畫伯の老て益々修養を加へゆくには、感服の外なきなり。畫伯は白髮白髯、頭に小なる緑なし帽を頂き、太きシガーを口にしつゝ、少しく腰を屈してよく語れり。日本語は既に忘れたりと云はれしが、しかも日本人との會話の呼吸を知ればにや、余が破れたるイングリッシュもよく通じ、畫伯の沈着なる物語りも粗ば解するを得たりし。再び日本に來遊し給はぬかと問ひしに、道のあまりに遠ければと笑て答へつ。かく身はロンドンに住めど、時をり日本美術家の訪ひ來らるゝにより、吾が故郷の人に逢ひしと同じ心地のせられて、いと嬉しなど語られぬ。

余は、余にとりても尤も樂しき二時間を、こゝに過せし喜びを謝し薄暮の忘れがたき畫室を辭しぬ。

* * * * *

同志の學生二人、初めて寫生に出掛けて、今や着色せんとすとき、不圖後ろの方を見て

甲「ヤ！君あすこへ三脚を持った奴が來たぞ」

乙「それは大變!!! 道具を仕舞つて早く逃ろく」

スケッチブック

K. S. K

△某先生門下の秀才達が、ある年五六人連れて寫主旅行に出掛け、諸所を寫し廻つて、終に箱根へと出て來たが、銘々風雨に曝されて、みすばらしい體裁でありながら、よせばよいのに福住へと泊り込んだ。さて翌朝出發といふので、大勢の女中達に送られて、玄關へ出て見たら、

齒の欠けた泥まみれのや、鼻緒の抜そうなのや、前のめり、後べり、ひき汐に河岸へ取殘されたやうな下駄や、護膜が切れたり、爪先が破れたり、底の剥がれた、掃溜めにころがつてゐるやうな靴が、磨きたてた沓脱石の上にずらりと並んでゐたのには、さすがに鐵面皮な連中も、女共の手前脇の下に冷汗を催したやうな。

△この連中が東京へ着いた時、

新橋で別れて各々宅へと俾を急がせた、さてそのうちの一人は腹が減つて堪らなくなつたが、懷中にあるものは宿屋の書付ばかり、いよ／＼窮して車夫に立替させ、途中のそばやで一時凌ぎをやらしたといふ。

△矢張りこの人達の話だか、宿屋の女中が、お湯があきましか



第十二回
緑を三寸



たら御召しなさいといふて來たので、自分の連れはもう出たのかと、早速風呂場へかけつけ、いてやと桶の蓋をとつたら、ワ１ツと中から飛出すものがあるので、氣絶しない許りに驚いたが、これは連れの男を嚇すために、風呂の蓋をしてうん／＼言ひながら待つてゐたのだといふが、さて／＼苦しい洒落をしたものさ。

△田舎で寫生してゐて一番困るのは、肥料桶を擔いだ百姓がしかも風上に立て見てゐられる時だ。あゝ早く往てくれ／＼ばよいと思つてゐるのに、この間來た繪かきばあの森を寫したの、あの橋の向ふにはこゝよりもつとよい景色があるのと、呑氣に話しかけて中々去りそうにもしない。見れば桶に一ぱいになつてゐるのに、きぞ自分でも重からうと、却てこちらから同情する次第さ。

△後に立て繪を見る人のうちには、黙つてゐるのもあり、又大に饒舌るものもある。煩冠りをとつて「御苦勞さま」と叮嚀に挨拶するのは田舎で、「こいつは一寸見られる」なんて小聲で言つてゆくのば東京の生意氣連。

繪ハガキ競技會記事

五月二十一日第十二回開會、出品者客員會員合せて三十二人出品數百十九枚選票の結果左の如し

課題 音(意匠)

綠 (技術)

一等	火の番	小林福太郎	森	澁谷	潔
二等	仲の町	大田南岳	景色	鵜澤四丁	
三等	梳の音	堀内 汎	景色	大田南岳	
四等	笛の音	山田全一	リボン	千葉	某
五等	水の音	澁谷 潔	景色	巖谷	某
六等	水の音	巖谷 夾日	若楓	三條	某
七等	雷鳴	篠原氏重	景色	瀧島利三郎	
八等	雷	鵜澤四丁	景色	金兒	貞
九等	電話	千葉 某	景色	堀内	汎
十等	杵の音	瀧島利三郎	景色	山田全一	

以下略

意匠の二等は重々しき木履の音にて、四等は月夜淋しき按摩の笛、五等、六等、共に蛙飛込む水の音、七等の雷鳴は蚊帳に線香、九等の電話は新らしき趣向なりし、客員巖谷小波氏の「定齊」は投票済みて後着せしが、意匠として奇抜のものなりき。

六月課題

五月雨(意匠)

竹(技術)

七月

剝那(意匠)

橋(技術)

二十日夕切七月二十三日開會

▲繪葉書課題に奇警なる御思つきあらば出題せられたし

讀て下さい

▲本誌發行の由來は、卷首に陳べたほか、猶一つの理由があります。

▲それは私の著書『水彩畫の鑒』も、後の『水彩畫階梯』も、唯その道に入るべき手引として書いた迄で、それ以上の事は學ぶ方々の研究に任して置きました。

▲然るに偶々、此書によつて學べる人々のやり方を見ますと、或る人々は、私が書中に吳々斷つてあるに拘はらず、寫生すべき物の色をそつち除けにして、私の着色法を紙の上に並べて居られ、また或る人は、みず／＼不利益な方式をとられ、何れも進歩してゆくべき路を踏外してゐるゝ方々が多い様であります。

▲このやうな有様を見ますと、私は諸君を門に入るべく手引した許りては氣が濟みません、不親切のやうにも思はれてなりませんが、今少し立入つて熱心な人々の御相談相手になり、共に／＼此道を樂しみたく思つた故であります。

▲本誌は二三友人の助力を得て漸く發行の運びになりましたが、御覽の通り粗末なも

のです。併し何れも本業の餘暇の仕事で、多くの時間をこれにかける譯にはゆかず、經驗もなし、不行届とは知りながらも、初號はこれで精一ぱいの出來で、この上は力が及びませんでした。是から追々讀者の注意を受けて、能ふだけ内容も外觀もよく致してゆくつもりです。

▲次號からは水彩畫に關した新刊圖書の批評をかきます。初學の方に御勧めしてよいもので、割合に世間に知れておないものもあり、また害のみあつて寸毫の益もない畫手本の類が、誇大の廣告をして人を欺いてゐるものもあります。かゝるものは水彩畫發達の上に少なからぬ影響を及ぼしますから、勉めて公平に批評して、善いものを推薦し、不良のものを出版界から黜けたく思ひます。

▲口繪の水彩風景畫は、英國のロバート・リットル氏の筆であります。穩やかなる畫風のうちに、筆力の剛健なるを見るべく、華やかなる色調はなくも、見飽のせぬ永久の生命が含まれてゐます。

▲口繪の製版は、その術に於て屈指の金子

政次郎氏の手に成り、秀典舎第一工場で印刷しました。色の調和の複雑な西洋畫の製版は、凡手のよくする處ではありません。殊に此繪の如きは少なからぬ苦心を致されたそうです。爾來本誌は、口繪に於ても他に眞似の出來ぬ程のよい物を、追々紹介したい考であります。

▲鯨船の圖は、本年春期、米國費府のアイトクラブに開かれた水彩畫展覽會に出たもので、取材の奇抜なる、筆路の大膽なる、唯々敬服のほかはありません。このやうな活た繪は、我國の展覽會では、容易に見ることが出來ぬやうに思はれます。

▲本誌の表紙は、四谷大番町なる尙山堂水野氏の好意によつて、雜誌としては他に類のない高尙なものを得ました。次項の繪葉書挾も、同じ工場で作つたものです。

▲本誌發送の途中、口繪の傷まぬやうにと帶封に厚紙を添えて置きました。この厚紙の中央にある八つの白點へ穴をあけ、リボンなり絹糸なり通して、裏で結ばれるときは、美しい繪葉書挾となります。この厚紙の添えてありますのは、本會からの直接購

讀者に限りります。

▲『水彩畫の葉』は、説明の不充分な點が多く、猶書加へたい處がありました故、昨年の春第十五版限り絶版して、更に内外出版協會から『水彩畫階梯』を發行しました。然るに、近頃元の出版者の新聲社でなくて、何處よりか『水彩畫の葉』第十八版といふのを出してゐます。そして著者に一言の斷りもなく、書物の體裁を變へ、口繪には著者筆としてありながら、全く私の知らぬものさへ挿んであります。私は元より水彩畫の普及を冀ふほか他意はありませぬ故、本文さへ間違つてゐなければ、發賣を差止やうとも思ひませぬが、所謂十八版の書を通讀して見なければ解りません。何れに致せ、私は『水彩畫の葉』第十五版以後のものには、一切責任を持たぬと申とを、爰にお斷りして置ます。

* * * * *

本誌の編輯上其他に對して御意見ある方々は、遠慮なく御注意を給はります、編輯者は出來得る限り御希望に副ひ、本誌の進歩を圖るべく候。

近事雜聞

■繪葉書品評會 日本葉書會の催にかゝる繪葉書品評會は、前月第一土曜日午後より、麴町なる巖谷夾日氏の宅に開かれ、主人及小波、南岳、米齊、汀鶯諸氏參會、近刊繪葉書數種に合評を試み、後各自合作の席上繪葉書を交換し、夜に入て散會したりといふ。

■俳諧繪葉書夏の部 日本葉書會發行の俳諧繪葉書は齋藤松洲氏の筆にて既刊春の部極めて好評なりしが不日出版さるべき夏の部は更に清楚にして氣品高きものなりといふ。

■春鳥會繪葉書 本會繪葉書競技會に出てし一年間の傑作を抜きしものにして、第一輯には左の人々の作あり
お福さん 鶴澤四丁 藤むすめ 巖谷夾日
花見ふね 瀧島寛水 ひかり 川俣自輔
白百合 山田全一 京人形 小林珠郎
次輯は水彩風景畫のみにして、八月初旬出版さるべく、發行所は日本橋區通二丁目松聲堂なり

■廣告繪葉書 松聲堂の廣告繪葉書は、本會の新案で特別廣告に限り、此繪葉書を添へて註文する時は總て二割引にて發送すといふ、詳しくは廣告を見られたし

會告

■學校又は同志の間に、寫生會、エハガキ會等の設けあるものは、其景況をなるべく詳しく通報せられたし

■前項團體及び個人の作品の現物、若くは寫眞を寄贈せらるれば、優秀なるものに限り、寫眞版に付て、本誌に登載すべし
左の事項につき廣く投書を求む

□水彩畫に志せし最初の動機

□始めて戶外寫生を試みし時の感

□寫生中に起りし興味ある出來事

□畫を學びたる爲めに得たる顯著なる利益

■以上切の期を定めず、半紙十行二十字詰にて、簡單に、字體明瞭に認められたし
■投稿の返戻を望まるゝ方は、相當の郵券を添へられたし

■水彩畫に關する質問にして、一般讀者に有益と認むるものは、答へを紙上に掲載すべし、但初めより返信料を添へらしものは直ちに答書を送るべし

■眞野紀太郎氏は、遠近法に關する質問に答へらるべし。
但複雑なるもの、圖説を要するものは此限りにあらず

池田文房堂

◎敝店發賣品◎

[illegible]

文庫

錢六拾五圓壹金前冊貳拾〇錢四拾八金前冊六〇錢五拾金冊一價定
錢六十券郵本見●宛錢一稅郵●錢八圓貳金前（共冊四刊增期定）年々一

寄稿略則

文庫は明治二十二年の創刊にして隆替常なき文學雜誌中最古く最堅固に發行部數最多く讀書社會に最勢力を有す近來本誌の雄風を羨みて模倣するもの相踵ぐを以て觀るも其版圖の益々擴大するを知るに足らむ本誌の特色は虛名なくして實力ある天下の秀才を一堂に招き集むるに在り凡そ新文士を待つこと最自由に最公平なる本誌に若くはなく趣味の清新材料の豊富亦竊に自ら許す所その徹頭徹尾青年作家の紹介を以て自ら任じ未だ曾て渝らざることを十年一日の如くなるは明治文壇空前の事業にして又本誌の獨壇世の名を青年雜誌に假託して事實は却て之と表裏するものと自ら其撰を異にするを確信す天下の俊髦冀くは競うて趨り來り本誌の微志を成さしめよ

（後付の二）

記事政治に渉るもの若しくは風俗を壞亂するの虞あるものは採らず
未完の原稿は大抵採ることなかるべし字體亂雜のものも亦然り
原稿の字數は一行二十字詰用紙は半紙大に限らるべし
寄稿には毎篇必ず住所姓名等を附記せられたし但紙上には匿名又は變名にて出すも差支なし
文章詩歌俳句等種類を異にするものは各別の紙を用ゐらるべし文章は篇を異にする毎に用紙を新にせらるべし
原稿紙中に用事の文句を認むるは妙ならず
原稿返却の請求に應ぜず郵稅先拂又は不足のものは一切請取ず

東京 本郷 駒込 西片 町十 番地 内 外 出 版 協 會

大 下 藤 次 郎 著

水彩畫階梯

(再版 * 定價五拾錢 * 郵稅四錢)

▲ 口 繪

石版十
五度刷

▲ 製 本

總クロース
金銀模輸入

『美術新報』

本書は水彩畫の妙を以て聞ゆる大下氏が、曾て著したる水彩畫の葉の十六版を出すにあたり、更に力をこめて訂正し、之が題號を改めたるものにして、専ら少年初學の爲めに寫生の準備、寫生の方法、色彩の説明、著色につき著者の經驗、學理上色彩の定義、模様畫に於ける色彩の應用、質問につきての數綱に分ち、更に細目を立てて、縷々

詳述する所あり、又著者の筆に、**丁寧親切を極めたるもの**なれば、**實に初**る圖、挿畫、色の見本等を挿み、

心者のみならず之に志あるもの**是非一顧を要する好書**なりといふを憚らざるなり。

『日本人』

著者が斯道の能手たるは人多く知り、著者の水彩畫の葉がいかに青年アマチュアを裨益する所多かりしかは、これまた世の多く知る所、其後再び海外に遊び、

大に研究發見する所あり、**記述の用意周到を極めて**、寫生の準備より始めて、**解**て別に此著を成せり、

說丁寧、普通一般のことは網羅して遺さず、殊に質問に對して説明の勞を執らんと云ふ如

き、其忠實の意を多とすべし。

▲ 質問自由

著者は本書讀者の質問に對して應答の勞を辭せず

(後付の三)

東京 本郷 駒込 四片 町十 番地 内 外 出 版 協 會

大下藤次郎先生の筆

水彩繪はがき

六枚壹組

正價金二十五錢

郵税金二錢

石版拾五度印刷

頗る優美高尚

大下先生の水彩畫に造詣深きは今更らゐを俟たず左記諸新聞紙の批評を一讀して其の眞價を知られんことを

東京都新聞評

水彩繪葉書 大下藤次郎氏の筆にて東京近郊の六枚一組、清楚にして氣品高きは世間にありふれのものに頭角を抽んでたり

二六新聞評

水彩繪はがき牛込盛文堂より發行の同葉書は大下藤次郎子畫にて六枚一組金貳十五錢何れも清酒なる出來にて時節柄の物なり

發行所

東京市牛込區
神樂町三丁目六

盛文堂書店

(後付の四)

繪金 夜色 叉

往復
はがき
形

六枚壹組◎金拾錢郵稅金二錢郵券代用

一割増

故尾崎紅葉柳川春葉編
先生原書大下藤次郎密畫
十千萬堂藏版

金色夜叉は明治の一大傑作にして、故紅葉先生が天下獨歩の才を擅にし給ひし物なるは、世人の夙に知る處なり、繁鋪今圓十千萬堂の許可を得て、柳川春葉先生此名著の中より特に優れたる六節の文章を援筆し、當代洋畫界の巨匠大下藤次郎先生に請ひて、其妙手に成れる繪畫を附し、六葉一組の封緘繪端書となす、其體裁は僅に普通端書の二倍に過ぎざれども、中に各數百字の名文と、清新なる繪畫及故紅葉先生専用の原稿用紙を縮寫せり、試に一部を手をせんか、文と畫との縁は巧に幾順の珠を聯れ、一讀直ちに此大傑作の大意を知るに難からず、加之意匠の實用に適せるもの、近來繪端書の發行幾百千種に及ぶと雖も、未だ曾て斯の如き美麗高尚なる物あるを知らざるなり。夫れ金色夜叉は明治小説中の金剛石なり而して此繪端書も亦斯界の寶石、長くアルバムに光を放ちて原著の名譽を損するなかるべきなり

發行所

東京市牛込區
神樂町三丁目六

盛文堂書店

(後付の五)

歐米流行斬新の夏物種々到着
仕り候間多少に不拘御用向仰

西洋小間物各種

紅屋洋品塵

電話浪花千百六番

東京市日本橋區

兩國米澤町

三丁目

一番地

DEALER IN

General Foreign Goods.

NO 1 YONEZAWACHO

3 CHOME

NIHONBASHIKU

Tokyo.

TEL

NANIWA

No.1106

Beniya

付け下され度御一報次第早速
參上御高覽に入れ申べく候

ニズミカラザル感興ヲ有シ、

水彩繪具

水彩畫用具

繪はがき用紙

繪はがき用具

油繪具

油繪用品

一錢郵券封入御申込次第
最新定價表無料進呈

京都寺町押小路

森親子商會

電話二千百廿四番

直輸入廉價販賣

直輸入廉價販賣

へ君諸、ルラゼ感ヲト便不ト廉不ノ料材

繪葉書競技會規定

本誌規定

(後付の八)

●繪葉書は自筆に限る○繪の種類を問はず○粗雑なるものはとらず。

●課題甲は意匠を主として、乙は技術を主とす。

●甲乙共客員にて審査の結果、一等を得し人には二等の繪葉書を、二等へは三等へと順次高點のものを交換返送す○一等の繪葉書は本會に保存す。

●課題外の繪葉書は出品十枚迄○A、B、C、の三級に分ち、出品數に應じて他人の作品を交換返送す。

●出品メ切は毎月二十日○メ切後到着の分は總て課題外と見做す
●出品の繪葉書には裏面(畫面に非ず)に姓名若くは雅號を記入されたし

●競技會は毎月第四日曜日午後一時より小石川目白坂中程大下藤次郎方に於て開會○出品者は參觀自由。

●出品繪葉書は開會後五日以内に交換返送すべし○結果は雑誌「みづゑ」にて報告す。

●壹圓の出品毎に會資金五錢を要す。

發行日

毎月一回三日發兌

定價

一冊十八錢郵税一錢五冊郵税共前金九十錢十冊郵税共前金壹圓七十五錢見本一部郵券にて二十一錢

注意

前金の外一切送本せず○前金切れたる時は帶封を朱書すべし○代金は郵便爲替を望む○拂渡局は小石川小日向水道町郵便局○郵券代用はなるべく一錢若くは五厘切手にて必らず一割増送金不足の際は殘金着迄發送せず○未納又は不足税の郵便物は受取らず○代金の受取證を要するものは郵便切手一錢五厘を送れ○照會は往復はがき○住所姓名は明記されたし
一頁金八圓半頁金五圓

廣告料

明治三十八年六月二十五日印刷
明治三十八年七月一日發行

(第一)

編輯兼發行人 大下藤次郎
東京市小石川區關口駒井町三番地

印刷者 青木弘
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所 春鳥會
東京市小石川區關口駒井町三番地

複製
不許

ヤクモツヤ



産地 直輸入
新鮮果物 廉價販賣

目下北海道林檎、臺灣バナナ、
阿波鳴門蜜柑其他販賣致居候
時々御用伺ひの爲め品物持参
御覽に入るべく、尙ほ御註文

により配達致すべく候

神田駿河臺北甲賀町十番地
(御茶の水橋通)

南 北 屋

裏面を御
覽下さい

繪葉書競技會規定

本誌規定

(後付の八)

●繪莒書は自筆に限る ○繪の種類を問はず ○粗雑なるものはとらず。

發行日
定價

每月一回三日發兌

一冊十八錢郵稅一錢五冊郵稅共前金九十錢十冊郵稅共

錢

〇は帶封を朱書
 〇は小石川小目
 錢若くは五厘
 〇金着迄發送せ
 〇代金の受取
 〇照會は往

—

町三番地
藤次郎

町一丁目

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some faint smudges and discoloration, characteristic of old paper. The left edge of the page shows the binding of the book.

町一丁目

百第一工場

八町三番地

金

壹回

「み

●出品

郎

● 競技

れ

● 出品

● 出品

口
口
口

● 課題

は

二

●甲乙

● 課題

ず

繪畫

目下左記の品々販賣致居候

北海道林檎	一個二錢以上十錢
臺灣六分	一斤四十八錢
阿波鳴門蜜柑	一個四錢以上十錢
阿波夏蜜柑	一個三錢以上六錢
長州夏蜜柑	一個二錢以上七錢
肥前大枇杷	百斤十五錢以上二十錢

此他四季の何品にても御註文に應じ可申候

東京市内

ははがきにて御註文成下され候は、
配達可仕、はがきは御返戻申す

く〜候

地方よりの御註文

は左の11の6方
法によりなされ

にても誠實正直に御取扱申すべく候

第一の方法品目數量御示命成下され候はとも其代價運賃荷造費を合算し代金引換小包郵便にて御送申すべく候

第二の方法 何品と御指定の上郵便爲替にて御送金
成下され候は、當店に於て相當の品を選定し御送申
上べく候

明治三十八年六月二十六日第三種郵便物認可
明治三十八年七月一日發行 みづゑ 第壹

